

シロバナヤマジソの稀さ加減

海士町 丹後 亜興

“生育情報がほとんどない”という何とも不思議な植物。文献上で確認できたのは、わずかに宮崎県の一部のみである。他に確実と思われるのは、山口県の離島“角島”の海岸と、島根県での2地点(島根町と隠岐の津戸)。日本に3ヶ所だけとは信じられない…。

【1】発見の経緯

場所は隠岐の島町都万地区。津戸の集落へ向う道路入口の枝道で、今もちょっとだけ残っている旧道付近。海食崖(高さ10m程)の上に広がる岩山の斜面に薄く貼り付いていた。長径2m程度の小群落で、草丈は10cmにも満たず、花は老眼では見落とすほど小さくて疎ら(写真参照)。

この場所は、何かありそうだとここ数年来注目していたのだが、今まで全く気付かなかった。今回は(2016.9.24)すぐそばに坐って弁当を広げたのが幸いした。…と思ったが実は、7月末猛暑の日にもそっくり同じ場所で昼食を食べている。

今回たまたま目に止まった原因は、ちょうど花が咲いていたからだろう。花がなければ、目には映っていても意識できたかどうか。加えて、それほど暑くもなく帰りの時間に余裕もあって、気持ちのがんびりしていたのが良かった。この日を逃したら永久に知らないままで終わったかもしれない。千載一遇?或いは一期一会か。

現地で「知らないものだ!」と確信、一瞬緊張したが「どうせ有り触れた雑草だろう(トウバナ属?)」とテンションは上がらなかった。ところが帰って、シソ科を検索したらイヌコウジュ属で、島根県にも隠岐にも記録のない種だった。

【2】分布状況

以下のデータは、各県の“地方植物誌”に基づいたものである。

(● RDB 登載, ▲ ごく稀, × 記録なし, - 不詳)

北海道 ×,

青森 ×, 岩手 ×, 宮城 ×, 福島 ×, 秋田 ×, 山形 ×,

茨城 ×, 栃木 ×, 群馬 ×, 千葉 ×, 埼玉 ×, 東京 - , 神奈川 ×,

新潟 ×, 富山 ×, 石川 ×, 福井 ×,

長野 ×, 山梨 ×, 岐阜 - , 静岡 ×, 愛知 ×,

滋賀 ×, 三重 ×, 奈良 ×, 大阪 ×, 和歌山 ×, 京都 ×, 兵庫 ×,

鳥取 ×, 島根 ▲, 山口 ▲, 岡山 ×, 広島 ×,
香川 ×, 徳島 ×, 愛媛 ×, 高知 ×,
福岡 -, 佐賀 ×, 長崎 ×, 大分 ×, 熊本 ×,
宮崎 ●, 鹿児島 ×, 沖縄 ×

宮崎県は『宮崎県の生物』(室屋瀧雄・南谷忠志, 1992)に、「県北にごく稀, 海岸岩上」となっている。その後『宮崎県版レッドデータブック(2000)』で“絶滅危惧 I A 類”とされた。山口県情報はインターネット上のもので, 京大の村田源先生に同定を依頼したものだといふ。島根県同様気付かれたのは最近のこと。島根半島の島根町の産地は, 松江市の野津貴章(よしゆき)さんが数年前に発見された。私信によると, 隠岐同様に海岸の岩場。どうも“海岸近くの岩”が好みようだ。

手持ちの図鑑や植物誌で, 分布に言及しているのは以下のものだけだった。初心者向けの図鑑には名前すら出て来ない。

日本植物総覧 (牧野富太郎・根本莞爾 1931) ⇒ 「本州(中部)」

日本植物誌 (大井次三郎 1953) ⇒ 「本州(下総)」

原色日本植物図鑑 (村田源 1957) ⇒ 「本州(関東地方)」

日本草本植物総検索誌 (杉本順一 1965) ⇒ 「本州(千葉)」

Flora of Japan (G. Murata & T. Yamazaki 1993) ⇒ 「Honshu」

しかし, この内容をどう評価してよいものやら。ほとんど「下総習志野村」(原記載のタイプ標本産地: 千葉県)をなぞってるだけのように見える。そして, 大冊で詳細な『千葉県植物誌(2003)』には全く言及がない。何だか“幻の植物”めいて来た!

なお, 国外の分布は「韓国(南部)」で, インターネットを検索すると韓国のサイトが幾つか出て来る。韓国版レッドデータブックでは「Not Evaluated (NE) 未評価」となっていた。“未評価”は日本では使っていないカテゴリーだが, 絶滅危険性の詳しい評価がまだ済んでいない, という意味である。

【3】分類

よく似たものが 3 種類あって, 現在普通に使われている学名は以下の通り。

Mosla イヌコウジュ属

M. japonica (Benth. ex Oliv.) Maxim. ヤマジソ(広義)

M. japonica var. thymolifera (Makino) Kitam. シロバナヤマジソ

M. japonica var. hadae (Nakai) Kitam. オオヤマジソ

つまり, シロバナヤマジソはヤマジソの“変種”という訳である。

しかしながら、最初は独立種として新記載されたものだ。

Mosla thymolifera Makino, nov. sp. (1920) これは正式発表ではない裸名。

Mosla leucantha Nakai (1921) シロバナヤマジソ

Mosla thymolifera Makino (1926) アオヤマジソ

中井猛之進博士 (Nakai) の記載は詳細を極めたものだが、ラテン語なので筆者には読めない。ただ、劈頭でまず「牧野さんのとは違う」と断っているような…。そして面白いことに、牧野さん自身の著作である前記『日本植物総覧』では、中井博士の学名・和名を採用している。ところが、上記変種名の引用は「(Makino)」だ。

現行の学名(変種)への組み替えを発表したのは、北村四郎・村田源の両氏であるが(1957年)こういった扱いの通例として、その理由(根拠)については何も触れていない。亜種・変種・品種とランクを下げる時だけに限らず、他種の異名(同一物)として名前を消してしまう時さえも黙っているのが普通。理由も知らされず“種”が無くなってしまうことはよくある。「我が輩の判断だ、つべこべ言うな」ではないと思うが、今風に言えば説明責任を果たしていない。

ここで 3 変種の比較・検討をすべきであるが、筆者にはその資格がない。何しろ隠岐のシロバナヤマジソだけしか見たことがないので。図鑑類にも突っ込んだ説明はないし、大騒ぎして何かと賑やかなネット上の情報もほとんどない。理由はひとえにその“稀さ”にあると思う。実際に現物を比べて観察した人は、学者も含めあまりいないんじゃないだろうか。ヤマジソはまだしも、残りの 2 変種は滅多なことではお目にかかれない。筆者も 75 歳にして初めて出会った。

隠岐のものをシロバナヤマジソだと判断する根拠は、“花が純白”であることに加え、“茎や葉の一部が紫色を帯びる”傾向が全く見られないからである。ネット上で見るヤマジソの写真(これは多い)とははっきり印象が異なる。

他に重要な特徴は、葉をちぎって揉むと独特の強い香りがする事である(ヤマジソも同様)。チモールという精油だそうで、文献にもシロバナヤマジソはチモールが多いと書いてある。学名の *thymolifera* もその意。しかし、チモールと言われても判る人が何人いることや。シソ科の種は大抵匂うが、確かにこの香りには記憶がない。同じイヌコウジュ属でよく似ている イヌコウジュ *M. scabra* やヒメジソ *M. dianthera* とともに香りは明瞭に異なる。つまり、山野で怪しげなものに出会ったらまず匂いを嗅いでみるべし。

母種とされるヤマジソ(狭義) *M. japonica* var. *japonica* の分布状況は以下に見る通りであるが、オオヤマジソも大変な希産種で環境省指定(準絶滅危惧)、かつ5県「岩手・兵庫・島根・長崎・熊本」でレッドリスト種。他の県には記録すらない。島根県のは日御碕付近で近年発見されたもので絶滅危惧I類の指定。

【4】ヤマジソの分布

北海道 ▲,

青森 ●, 岩手 ●, 宮城 ●, 福島 ●, 秋田 ●, 山形 ●,
茨城 ●, 栃木 ●, 群馬 ●, 千葉 ●, 埼玉 ●, 東京 ●, 神奈川 ●,
新潟 ●, 富山 ×, 石川 ×, 福井 ▲,
長野 ●, 山梨 ×, 岐阜 ×, 静岡 ●, 愛知 ●,
滋賀 ●, 三重 ●, 奈良 ●, 大阪 ●, 和歌山 ●, 京都 ●, 兵庫 ×,
鳥取 ×, 島根 ×, 山口 ●, 岡山 ●, 広島 ●,
香川 ●, 徳島 ●, 愛媛 ●, 高知 ●,
福岡 ●, 佐賀 ●, 長崎 ●, 大分 ●, 熊本 ●,
宮崎 ▲, 鹿児島 ●, 沖縄 ×

各県ごとの植物誌やレッドデータブックに一々当たった結果である。確かに稀なものではあるが、分布域は広く日本全土に及ぶ。シロバナヤマジソやオオヤマジソとは天と地の違いがある。最初は、ヤマジソの一型(単なる色変り)としてシロバナヤマジソもここに含まれているのでは?と不安になった。しかしそれはあり得ない。

(1) “品種”ならまだしも、シロバナヤマジソはれっきとした変種である。変種に対しては余程分類に問題があるか、差異が微妙でない限り無視して落としたりはしない。

(2) 両変種の区別は容易と思われるし(花・茎・葉の色の違い)、一目で判るほど感じも違う。しかもごく稀にしか現れない希産種。当然分けてリストアップするだろう。

(3) 地元の植物誌はできるだけ種数を増やしたいものである。永年の積み重ねの総決算ともいえる植物誌で、明瞭な変種を一言も触れずに無視するとは考えにくい。例えヤマジソに含め省略するとしても、その旨の言及は必ずあるはず。つまり、地元の植物誌に載っていないことは、「無い(未確認)」を意味する。

ヤマジソは全国的な希産種として知られており、環境省のレッドリスト種(準絶滅危惧 NT)でもある。韓国では“未評価(NE)”。それにしても、環境省はシロバナヤマジソを何故指定しないんだ! 状況がよく分らないのなら(何しろ3ヶ所?にしかない)、“情報不足 DD”にすべきだろう。環境省自身ヤマジソの変種としてちゃんと認識しているのだから、無視す

るのはおかしい。

【5】精油成分

ヤマジソ・シロバナヤマジソ・オオヤマジソ 3 変種の比較に関し、分類の専門誌『植物学雑誌』(1965)で興味深い(注目すべき)論文を見付けた。著者は、大阪工業技術試験所精油研究室なる機関の所属。まえがきの部分を引用する。

“精油成分によるシソ科イヌコウジュ属の分類と系統” 藤田安二

「この報告は筆者の多年にわたるシソ科イヌコウジュ属の精油研究の現在における総括的結論であって、まず精油成分利用の種の分類について述べ、続いて精油成分の発現様式による種の系統の解明に関して論じるものである。… 筆者は 1930 年頃から台湾産の本属植物の精油成分の研究を開始し、次第に日本および中国産のそれに及んだが、形態的に区別し難い種も精油成分がはなはだしく異なる場合が多く、形態と成分との二つの見地から、種の区別と系統とに関し多くの新知見を得た。…」

イヌコウジュ属の全種が、第 1 系～第 9 系に区分され、第 3 系がヤマジソ種群。結果を省略して紹介する。

① オオヤマジソ *Mosla hadai* Nakai ⇒ カルバクロール(58~74%)

② シロバナヤマジソ *Mosla leucantha* Nakai ⇒ チモール(66%)

③ ヤマジソ *Mosla japonica* Maxim ⇒ チモール(56%)

③-1 シロバナノヤマジソ(アオヤマジソ)

Mosla japonica Maxim. f. *thymolifera* Fujita (=M. *thymolifera* Makino)

⇒ チモール(57%)

精油成分の差異から、3 変種はそれぞれ当初の発表通りの独立種と結論づけている。シロバナヤマジソのチモール 66%はヤマジソの 56%とは種を分つに足るという見解。成分の異なるオオヤマジソは言うまでもない。とりわけ嬉しく思ったのは、“シロバナノヤマジソ”という品種の新記載である。これこそ、ヤマジソの単なる色変りの白花品に過ぎないものであろう。白花化は多くの種で広く見られる現象で、ヤマジソにもあって当然。牧野さんの標本はこれだったのか？ともかく、成分が抽出されているのでそういう白花品の存在は明か。チモールは 57%で 66%のシロバナヤマジソとは別物である。

では隠岐のものはどちらなのか？“茎や葉が緑色で紅紫色を帯びる傾向が皆無”な点で、この品種シロバナノヤマジソ *M. japonica* f. *thymolifera* ではない、と判断しておく。

実は最近、『Flora of Japan (1993)』(日本植物誌 全 8 巻)でシロバナヤマジソが、

Mosla japonica f. thymolifera (Makino) Yamazaki et Murata

となり、ヤマジソの品種に格下げされた。決して同調した訳ではないが、今後これを採用する人が出るだろうと憂鬱になっていた。しかも私見ではあるが、よく例のある“花の色変り(白化)”にしては、出現の仕方が不自然である。通常、白花は通常品に混じってポツンポツンとアトランダムに現れる。特定の地域(宮崎・山口・島根)だけに、しかも白花だけ固まって、は異常に思える。独立種または変種説に与したい。

同書で、オオヤマジソはヤマジソの異名に落とされ消えていたが、最新の『改訂新版 日本の野生植物』では *Mosla hadae* Nakai として復活した(米倉浩司 2017)。ヤレヤレ。

【6】環境の保護

今回のシロバナヤマジソがあった地点「おとめこ海岸」は、「海に沈む夕陽が見える場所」として地元ではちょっと知られている。だけど、展望台・トイレ・歩道等の整備はしないで、今のままにしておいて頂きたい。微妙なバランスによって特殊な環境が維持されており、大袈裟に言えば全国的にも貴重な場所である。隠岐としても、そのままの状態で保存し後世に残す義務があるような…。観光スポットにしてはならない。人手が加わると、以下の重要種も直ちに絶滅の危機に瀕する。

- ・ ナガミノオニシバ *Zoysia sinica* var. *nipponica*
…今年発見したもので島根県初。塩沼地に生える南方系の種で、隠岐にあるのは注目に値する。岩上に小さくて(2m×4m)浅い沼がある。そもそも、塩沼地(真水と海水が混じる)自体が今や絶滅危惧。
- ・ エゾノヨロイグサ *Angelica sachalinensis* var. *sachalinensis*
…島根県ではこの辺り(かつては蛸木にも)にしかなく絶滅危惧 I 類。近くでは大山の山頂付近にも見られる。これは大山隠岐国立公園の指定植物なので、盗掘すると懲役刑を含む罰則がある。
- ・ ホソバシュロソウ *Veratrum maackii* var. *maackioides*
…島前では高崎山だけで見られる。島後ではこの周辺にしかないようである。話には聞いていたが今年になって初めて確認した(約 30 株)。“北限自生地”である。

なおシロバナヤマジソについては、そんなに珍しいものなら「持ち帰って鉢に植えよう」などと思いませんか。綺麗でも何でもない鑑賞価値ゼロの一年草であるし、数人が取れば無くなってしまうほど量も少ない。

花は長さ4mmほどで小さい。2つずつ開く。



高さ10cm前後。陽の当る岩上に広がる。



都万地区津戸入口 2017.9.21 撮影